指定諮問書

考古資料

寺田遺跡出土黄釉鉄絵盤

本黄釉鉄絵盤は平安時代末～鎌倉時代初頭頃（１２世紀末～１３世紀初頭頃）の貿易陶磁で，平成１３年度に実施された発掘調査で本市西芦屋町に所在する寺田遺跡から出土したものである。

出土した際には，手の平程の大きさに割られて，径３５㎝，深さ３０㎝の円形の穴の中に入れられていた。このような出土状況から，日本列島において伝世した後，地鎮等，何らかの祭祀に用いられたものと推定される。

出土した破片からは，全体の３分の２程度まで復元することができた。復元された黄釉鉄絵盤の大きさは，直径３４．６㎝，高さ９．３㎝である。口縁部は玉縁状に仕上げられており，内弯する丸みを帯びた体部をもち，底部は上げ底となっている。黄釉は内面全体に施されているが，外面では口縁部を除いて施されていない。底部内面には，褐色の鉄絵による一輪の牡丹の文様が描かれている。中国福建省磁灶窯産の華南製品であり，華中明州を経由して，貿易港博多に入り，瀬戸内海航路で東進し，大輪田泊において陸揚げされ，芦屋に至ったものか，薩摩坊津を経て太平洋ルートで畿内に入ってきたものと考えられる。

黄釉鉄絵盤は，日宋貿易における大陸との窓口である博多港のあった福岡県博多遺跡群において集中的に出土しているものの，全国的に類品が乏しい。兵庫県下では，本例の他に，平安京と瀬戸内海の重要な物流の中継地であった尼崎市大物遺跡（三国川河尻）から出土した一例が確認されているのみであり，大変稀少な大陸産文物であることがわかる。

以上のように，本黄釉鉄絵盤は，平安時代末～鎌倉時代初頭頃の中国・宋との国際貿易や当該時期の芦屋の国際性を考える上で貴重な資料であり，稀少な貿易陶磁として高い学術的価値を有するものである。